

【三重】池畑運送（池畑弘樹社長、三重県四日市市）は車両150台、従業員211人を擁し、石油製品と食料品の輸送を手掛けている。2018年、タイガー

（茂岡賢明社長、東京都千代田区）を通じて、全車のデジタルタコグラフを、ド

池畑運送

ライブレコーダー（DR）と連動する富士通製のネットワーク型デジタコに入れ替えた。

池畑社長は「デジタコはもはや、旧来型アナログ式タコグラフの単なる代用品ではない。DRと組み合わせれば、運行管理や労務管理などあらゆる情報を集約

労務管理と経営 両立

した上で可視化できる。いったんドライバーを送り出してしまおうと、外での行動は管理者からは見えず『お任せ』になってしまおう」と強調する。

以前から行っていた車両の動態管理も、ライブ化したことで精度が格段に向上した。また、ドライバーの運転傾向もより細かい分析が可能になった。池畑氏は「DRには運転席を撮影するインカメラも装着した。ドライバーから『プライバシーの侵害だ』と不満の声

が上がったため、事故、トラブル、クレーム、問い合わせ以外で管理者は映像を見ない、ドライバーはカメラを隠さない、という使用規定を作った」と明かす。



タンクローリー車のカメラ増設も検討

更に、食品を輸送する冷蔵トラックのバックカメラは、納品作業の確認にも活用している。「作業チェックに特化したスタッフが一つひとつ厳しく目視している顧客もいる。今後はタ

ンクローリー車の車体左右にも、作業確認用のカメラ増設を検討している。仕事の可視化は改善につながるだけでなく、結果的に管理者の負担を軽減する」と池畑氏。

デジタコ&DR 情報を可視化

働き方改革が求められる中、労務管理と事業経営を両立させることは、トラック運送事業者にとって共通の課題だ。池畑氏は「1人当たりの労働時間が減ること、1人当たりの売上高が減ること。加えて人口減少による物流全体の縮小も進んでくる。今後も厳しい経営環境が続くだろう」と指摘する。

その上で、「生産性向上の観点でも、大事なキーワードは可視化だと思ってるが、それはデジタコとDRなしには実現しない。ビッグデータの有効活用なども含め、デジタコの更なる進化に期待している」と力を込める。

（星野誠）